

バッドエンドを回避しようとするほど、

敵国皇太子の執着にあい、

逃げ場のない毒婦は溺愛される。

と二巡目の人生は、ぐちゃとろ絶頂人形でした。

第一章 断頭台の悔恨

第二章 決意の拒絶と灰色のドレス

第三章 愛ゆえの蹂躪

第四章 逃亡の果ての再会

第五章 執愛の連行路

第六章 執愛の後宮

第七章 最高のバッドエンドの先へ

## 第一章 断頭台の悔恨

首筋を叩く、真冬の凍てつく風。風切り音をあげているそれは、まるで、これから私の命を刈り取ろうとしている死神の、冷たい吐息のようだった。後ろに回された手は、きつく縛り上げられ処刑人の手にゆだねられている。

私は聖アルカディア王国の毒婦として、断頭台へと続く石段を一步步、重い足取りで登っていた。私の背後からは、かつて私を王国の至宝と敬い、その美しさを讃えてくれたはずの国民らの、汚物を見るような視線と罵声、容赦なく投げつけられる石や腐った果実が飛んでくる。

「死ね、売国奴！」

「国の面汚し！ 貴様のせいでどれだけの人が死んだと思っっているんだ！」

石がこめかみに当たり、温かい血が頬を伝ってしたたり落ちる。もう、その痛みさえ今の私には現実感がない。もはや、その時を待つのみだ。

これは、仕方のない報い……。私は、ガルガディア帝国の皇太子である、シュヴァルツ・フォン・ガルガディアに、魂を奪われるほどの恋をした。彼を助けたい、彼の力になりたい。ただその一心が、私を狂わせてしまう。父である公爵を騙し、代々守り続けてきた王国の軍事機密を盗み出して、彼に捧げ続けてしまった。それが平和への鍵だと信じて。

だけど私の献身は、彼を利するのではなく、帝国の血に飢えた野心に、絶好の侵略の口実と弱みを握らせるだけの結果となった。帝国の議会は、戦争を引き起こした罪人として、私を断頭台へ送ることで、王国の国民感情を逆撫ですることなく、その全土を無傷で手に入れる算段を立てたのだ。

処刑台の上、最後にもう一度だけ、死ぬほど愛した皇太子の顔を見た。正面の玉座に座るシュヴァルツ。彼の顔は、かつて私に甘い夜の睦言を囁いた時とは、似ても似つき得ない、死人のような青白さに染まっていた。

「シュヴァルツ様……」

彼も、私を心から愛していた。かつて二人で忍び込んだ王宮の図書室で、彼が私の指に口づけをした時の言葉。

「たとえ世界を敵に回しても、君という光だけは手放さない」

そう、誓ってくれたあの夜の熱は、既にまぼろしだった。

どうする事も出来ない……。

冷酷な帝国の政治の力。鉄の掟に抗いきれず、最愛の女を殺す命令書に、署名しなければならなかった彼の絶望。彼が玉座の肘掛けを粉々に砕き、

掌から血を流すほど震えているのを、私は見た。

「……愛している、ルーデリア。地獄で待っていてくれ。私もすぐに行く」

今にも消え入りそうな顔が、私がみた最期の記憶だった。

「言い残す事は？」

「ありません」

ギロチンの刃が落ちる。視界が回転し、地面が迫る。

しかし、その瞬間。

「ああああああああ！！こんな運命、認めるものか！！私がこの手で神を殺してでも、お前を取り戻してやる！！」

真っ暗な闇の中で、私は彼の、喉が裂けんばかりの愛の絶叫を聞いた。

世界を呪い、神の定めた因果をねじ伏せようとする、魔王の叫びだった。



## 第二章 決意の拒絶と灰色のドレス

暗い……けど何かがおかしい。私は死んだはず……。

「お嬢様、ルーデリアお嬢様。そろそろお目覚めくださいませ。今夜は、大切な晩餐会です。ガルガディア帝国の皇太子殿下がいらっしゃるのです。王国の命運が、かかっているのですよ！ 最高に美しく装わなければ！」

侍女アンナの声だ。

「アンナ？」

「何を寝ぼけていらっしやるのです。私に決まっております」

「あ、アンナ！」

思わず、侍女のアンナにしがみついてしまった。

「どうなされたのです。怖い夢でも見てしまったのですか？」

どうだろう？ 夢にしては生々しすぎる。いや、あれは夢などではない。私は実際に断頭台に送られて、処刑されたはずだ。

「夢……じゃない……はず……」

「さあさあ。お支度のお時間です。起きてくださいまし」

私は急いでベッドを降り、鏡を見る。

「生きてる……」

一巡目で戦火に消えたはずのアンナが今、私の髪を梳かそうとしている。そこには、首に傷一つない、瑞々しい陶器のような肌をした十九歳の私。紫水晶の瞳は、未来を知るがゆえの暗い影を宿していた。

戻った……？

信じられなかった。だが、あたりの空気も感触も現実だった。

うそ……。

本当に、時間が戻ったんだわ。

「アンナ。今日は何？」

「まだ寝ぼけていらっしやるのですか？　今日は晩餐会の日です」

なら私はまだ、シュヴァルツ・フォン・ガルガデアに出会っていない。

神様、ありがとう。今度は、絶対に失敗しない。二度目のチャンスは、彼を愛さないようにします。

その訣別の決意に、ポロリと涙が出て来る。

「どうされました。お嬢様？　今日はお楽しみにしていた日ですよ？」

私は泣きながら、鏡の中の自分に誓った。

何も始めない、彼との恋は一度目の死という最大の失敗で十分に学んだ。  
愛すれば破滅する。ならば、出会いそのものを無に帰せばいいこと。

13

「アンナ。用意してあつた深紅のドレスは、今すぐ暖炉で燃やして」

「はい？」

「もう、ドレスはいらないわ。燃やして頂戴」

「燃やすのですか？ あめ美しく艶やかな新しいドレスを？」

「ええ、一瞬で灰にするのよ。代わりにクローゼットの最奥に眠っている、修道女が着るような、地味で厚手で、身体のアインも分らないような、灰色のドレスを出しなさい。宝石も、装飾も、香りも一切いらないわ」

アンナは絶句した。王国の令嬢たちがこぞって美しさを競う晩餐会で、灰色の喪服のような格好をするなど、正気の沙汰ではないからだ。

「な、なにを。あのドレスは、お嬢様がわがままを……失礼いたしました。お館様に、お願いをして買った物ではありませんか」

「いいの。燃やすのがダメなら、質屋にでも放り込んできて」

「お嬢様！ お館様がお怒りになりますし、何よりシュヴァルツ殿下に対し

て失礼に……」

「いいのよ、アンナ。私は、今夜、誰の目にも留まらない背景になるの。私はただの不快でつまらない、地味な令嬢として記憶の片隅にも残らない。シュヴァルツ殿下にとって、価値のない存在にならなければならないの」

結局、化粧も、わざと顔色を悪く、血の気がないように仕上げた。

そして……。

その夜の、王宮の晩餐会場。煌びやかなシャンデリアの光が降り注ぎ、着飾った貴族たちが蝶のように舞う中、私は会場の暗い隅の、カーテン下。巨大な大理石の柱の影にそっと身を潜めた。一巡目の人生では、あるとき、

深紅のドレスで中央に立ち、殿下の視線を惹きつけるために艶然と微笑み、彼を誘惑しようと真っ先に歩み寄った。けれども今は、壁の花どころか、ただの塵にでもなったつもりで気配を消している。

これでいい。殿下は今、多くの美貌の令嬢たちに囲まれ、その華やかな中心にいるはず。私なんて、視界に入りさえしなければ……。

しかし、不意に会場が静まり返った。

ドクン！

嫌な予感がする……。



人混みを真つ二つに割り、重厚な軍靴の音が、焦燥感を含んだ足取りで、私の方へと近づいてくる。心臓の鼓動が耳元で鳴り響く。

か、隠れなくては……。

逃げたい。けれど、足が震えて動かない。影が私を覆った。見上げると、そこには一巡目よりも遥かに鋭く、そして飢えた狼のような瞳を持った、愛しのシュヴァルツが立っていた。

「……見つけた。やっど、お前を見つけたぞ！ ルーデリア。なぜ隠れる？  
なぜそんな、死人のような色を纏っているんだ」

掴まれた腕は、一度目よりも遥かに強く、骨が軋むほどの圧倒的な力。

「殿下……。お初にお目にかかります。私は体調が悪く、これにて失礼を」  
「初対面だど？ 違うだろ！ その、すべてを奪われた女の瞳……。！ お前も、あの雪の日の断頭台を覚えているのだろう！」

衝撃だった。頭を、強く殴られたようなショック。なんと目の前の彼は、私と同じように、時をさかのぼって目の前に現れたのだった。

「シュヴァルツ様……」

「ルーデリア！」

思いきり地味にしたところで、逃げる事など、できはしなかったのだ。周りの令嬢たちの声が、はつきりと聞こえて来る。

「やはりそうよね……」

「国の至宝だもの、どんなに地味にしても本物は輝くものだわ」

「あの大国の皇太子が見初めるのは、やはり大粒のダイヤモンド……」

会場がざわめくのも耳に入らないのか、シュヴァルツは私の手を引く。

「来い」

彼は周囲の視線も構わず、私をテラスへと引きずり出した。

フワリ！

夜風が激しくカーテンを揺らし、月光が彼の整った横顔を照らし出す。

「殿下、もう遅いのです。私は、二度とあなたを愛しません。関われば、また同じ惨劇が繰り返される。あなたが私を殺し、私があなたを壊します。そんな地獄は、一巡目で十分ですわ！」

「その地獄からお前を救い出すため、自らの魂を神に売って戻ってきた！お前が私を愛さないというのなら、この魂の鎖でお前を繋ぎ止めてやる。二度とお前を死なせない。誰にも、指一本触れさせない。お前の理性など、快樂で溶かして、私なしでは生きられなくしてやる！」

彼は私のドレスの足元を、一巡目では一度も見せなかった野蛮な力で、  
一気に引き裂いた。

そして、これが……私達の二巡目の始まりだった……。

### 第三章 愛ゆえの蹂躪

私はもう、シュヴァルツに会う事は無いと思っていた。それに関わらず、なんとシュヴァルツも、未来からこの時代に戻っていたのである。

「どうやって……」

「生涯をかけて、時を戻す禁術を探し求めたのだ」

「だから……私達は戻ったのでございますか？」

「そのとおりだ！　そして、その時は来た！！」

なんと言う執念。なんと言う想い。私は打ち震えていた。

「シュヴァルツ様……」

「もう、お前を失う事はない！」

だが……この出会いは……破滅を呼ぶ……。

「やめてくださいまし、シュヴァルツ様。もう、帝国の道具にはならない」

「道具ではない。お前は私の心、私の一部なのだ！思い出させてやろう。お前のその身体が、どれほど私の愛撫に飢え、私の熱を求めていたかを。一巡目の記憶が、お前を裏切るぞ、ルーデリア！」

彼の熱い口づけが、私の耳元を執拗に舐め上げてくる。一度目の人生で、彼が毎晩のように愛し、教え込んだ秘められた弱点を、彼は残酷なほど、

正確に突いてくる。耳たぶを噛まれ、舌で鎖骨を舐めあげられるだけで、私の身体は裏切り者のように熱を帯びていく。

変わらない……熱い愛撫……。

力が抜ける。

ぷちゅ……。

「ほら、ここだろ。お前はここを攻められると、すぐに足の力が抜けて、私に縋り付くのだろう？」

「ん、ああああっ！ だめ……思い出させないで……っ！」



彼の指が、裂けたドレスの奥、とろとろに解けた私の最奥へと侵入する。拒絶しようとしてるのに、体は、彼の指の動きを魂レベルで記憶していた。

くちゅう♡じゅぶぶ♡

「ほら。もうこんなにトロトロになっているじゃないか」

「ダメ……ダメなの。本当に……」

「一巡目の、私をただ盲信して、しおらしく寄り添っていたお前よりも、必死に私を拒絶しようと、睨むお前の表情が、どれほど私を狂わせるか、分かっているのか？」

「違う、これは……恐怖で、震えているだけ……っ！」

嘘だ……。

真っ赤な嘘。指が一本、二本と増えて、私の最深部をかき回すたびに、私は腰を自分から彼へと突き出してしまふ。回避しようとすればするほど、膣の内側の筋肉が、彼の指を熱く締め付け、更なる快楽を求めて波打つ。

「ああ……熱い。ルーデリアのここは私のものだ」

「シュヴァルツ様……」

ぴちやぴちや♡♡

「ほらお前の理性は、私の指に負けているぞ。お前が逃げようとするほど、私は、お前を追い詰め、私の名前だけを呼ぶようにしてやるのだ」

じゅくじゅくじゅく。

指は、腹の奥で蠢いている。

するとシュヴァルツは、激しく中をかき出し始めた。

「ああ、だめ！ 出る。それは、だめ」

ぴちやぴちやぴちや！

どんどん快感が増していく。彼は、私の中の一番良い所を知ってる。

「どうだ」

「あっ！ あっ！ あっ！」

窓の向こうでは、舞踏会が行われているが、シユヴァルツが居るので、だれもこちらに来ることは無かった。

的確過ぎる……私の感じる所を知り尽くしている。

「体は正直だな」

じゅ。ふ。じゅ。ふ。じゅ。ふ。じゅ。ふ。！